

丹波新地域ビジョン検討委員会「交流・元気分科会」 記録

1 開催日時 令和3年3月8日(月) 18:00～20:00

2 場 所 柏原総合庁舎 柏原職員福利センター 1階会議室

3 出席者

委 員 (五十音順)

安達委員、足立委員、構井委員、清水(夏)委員、鈴木委員、  
瀧山委員、宮垣委員

※欠席委員：中川委員

事務局

丹波県民局：柳瀬県民交流室次長、西原班長、竹村

4 内 容

(1) 開会

・柳瀬次長あいさつ

(2) 報告事項

・スケジュールと方向性

協議事項

・リーダー決定→自薦他薦なし。事務局から清水委員へお願いし、リーダー就任承諾

・意見書を元に意見交換

5 意 見

[委員]

上から順番に、30年後の目指すべき姿を中心にご意見をいただきたいと思う。一人一人ご発言いただいた方がよいか、それとも項目ごとにいった方がよいか。

[委員]

項目ごとをお願いします。

[委員]

では、交流の柱の移住からいく。補足説明なり、補足説明が欲しいというのはあるか。

30年後の目指すべき姿のところにある「往来をする先ではなく軸足を置く拠点として、丹波から他の地域へ何度も出かけてく地域」とはどういう意味だろうか。このご意見を追加いただいたのはどなたか。

〔事務局〕

本日欠席の中川委員からのご意見である。

〔委員〕

ゲストとして来てもらえる地域はではなくて、ホームになるという意味かと思う。分科会としては、意味を把握していた方がいいと思うが。

〔委員〕

全てに関して思っているのが、数値目標がないのが気になっている。それを決めないとどこに向かって進んでいくのが分からない。

〔委員〕

数値目標はこの分科会だけに対することでなく、全体として検討するべきと考える。

〔事務局〕

兵庫県も KPI などを立てて事業を進めている。ひとつひとつにマッチするものがあるか精査しないといけない。すぐには難しい。

〔委員〕

数値目標のワードひとつひとつに対する目標を立てるのは難しい。重箱の隅をつつくようだが、何度も来てもらうというのが何度か。など、指標をひとつひとつあげておくものではない。全体的な数値目標でなく、指標にかかるような数値目標を立てるのも、項目ごとに違う。

〔委員〕

移住の分野でいうと、現在丹波篠山市と丹波市には約 10 万人の人口がいて、30 年後どうなっていくかは実際数字が分かっている。目標として、その数字をあげていくべきなのか。それともその数をキープしていくのか、ということ。これから日本全体で 25% が減少すると言われているが、人口は減るが生産性のみあげるのか。アイデアの出しようもないのではないのか。

〔委員〕

ビジョンでそれを示さないといけないのか。

〔委員〕

丹波に魅力を感じて移住してきてもらうというのは、よその人口を取ること。

〔委員〕

数字だけがすべてではない。人の幸せ度を測るのに数字で表せないように、今の検討段階では必要でない。

〔委員〕

こういう意見もあるということを含めて進めていく。  
移住人口と関係人口という項目もある。面白いことが書いてある。「観光・交流以

上、移住・定住未満」。

〔委員〕

そもそもなぜ移住人口を増やさないといけないのか。ただ単に人口を増やせばよいのか。そういうわけでもなく、質なども高めていかないといけない。30年後を考えた場合にどんな人を増やすのか。3年だけ住む、5年だけ住む人口を増やすという考え方もありなのでは。関係人口を増やすということも言われる。移住・定住の間みたいな。

〔委員〕

数値目標が必要という意見もあるということで、分科会として提案していく。移住者の数なのか質なのか。どんな人が求められているのか。数でカウントするものではない。

〔委員〕

人口が減少していくので、それと同数の移住、定住の人口を求めるのは難しい。生産性のある人に移住してもらおう。ある一定期間住んでもらうためのまちづくりを考えていかないといけない。

〔委員〕

移住促進する意味を考えていかないといけない。

〔委員〕

キーワードを足したい。人口減少を埋めるだけでなく、目標値を減らしてもよいのではないかと。都市の論理というか、日本全体の論理や全国と横並びで数値目標を立てないで、丹波独自の目標数値で動いてもよい。例えば、高齢化率50%を越えたらやばいと言われているが、生き生きと暮らす高齢者ばかりなら、長期的に人口は増えなくても幸せであるなら、幸せの軸を変えてもよいのではないかと。その話は今は置いておくとしても、今の元気状態を保つためにどうするかという観点で話していきたい。移住促進もしていかないといけないということで、この分科会から提案していく。

〔委員〕

他の地域から移住してもらおうということも必要だが、生まれ育った人がずっと丹波で暮らし続けて分かることもある。丹波を一旦出て分かることもあるが、若い子たちは面白くないし丹波を出て行く。移住させない方向性のビジョンであってもよい。

〔委員〕

移住・定住、ずっと住み続けられるというワードも足していきたい。

〔委員〕

それができればベストだが、若い人が定住するには仕事がない。

〔委員〕

それぞれの柱の中に完全に分かれるわけではなく、クロスする内容がある。「仕

事」の内容を移住・定住のところに加えたい。

30年後の目指すべき姿には、丹波から出ていかないということを足した方がよいか。

〔委員〕

僕は出て行った方がよいと思う。若い人はいろいろな経験をした方がよい。定住というのは重い。もっと短期間で気軽に住める方がよい。その方が選ばれやすい地域になる。最終的に帰ってくる地域の方がよい。渡り歩いて色々なネットワークを作ってきてくれる。その方が色々な選択肢がある。

〔委員〕

どこかひとつに決めなくてよい。移住・定住というワードより住民のプロフィール・姿の方がいい。多様性があるって数値目標には立てにくい。

次の空き家問題に行く。

これは単に住処としての問題か。空き家ネットワークの説明を加えた方がよい。多様な価値があるというのを絞っていきたい。

私は今、空き家になっていた家をリフォームしているが、とても資金がかかる。空き家になる前に改修できればと思う。

〔委員〕

誰も空き家にしようと思って使っていないので、難しいと思う。子どもたちが帰って来て、跡を継いでくれると思って暮らしている。

〔委員〕

そうすると空き家になってからでなければ考えられないのか。

〔委員〕

気持ち的に、他の人には住んで欲しくないと思える人もある。

〔委員〕

現状が分かっていないので、30年後を考えることは難しい。

〔委員〕

現在丹波地域に、世帯数的には4.3万世帯あって、これから30年後となると5千～1万世帯くらいが空き家になる。

どういうものを残して、どういうものを整理していくのかを考えていく必要がある。居住する人を入れていくのか。事業をする人をいれていくのか。あるいは、都市部の人の資産運用にしていくか。

どれくらいの空き家が出るかを知る必要がある。

〔委員〕

空き家問題というのは分かりやすいが、これからどうするかとなると現状把握されていなくて、難しい。現状は空き家を増やしたくないということで落ち着いている。

〔委員〕

数年でも住むところを残しておきたい、ということもある。

〔委員〕

空き家が増えていることが問題なのか。持ち主が分からないことが問題なのか。住居が足りてないことが問題なのか。借りたい人に届いていないことが問題なのか。だからこそ空き家ネットワークという話がでてくる。

〔委員〕

人が住まない家は3年で傷む。その先、カテゴライズして使える空き家と使えない空き家に分けていかななくてはいけない。全部は救えない。利用価値のあるところをどういうふうに活用していくか。

〔委員〕

その利用価値は何で測るのか。

〔委員〕

用途によって変わっていて、居住するとなると古民家は難しいところもあるが、事業とすると古い家であることが価値。こういう使い方をするならこういう家を残しておくべき、となる。1年も住んだら潰れそうという危険な家は整理するべき。明確なラインや制度を作っていくことが大事。

〔委員〕

カテゴライズすることが大事。用途を入り口にして分類していくとか。分類した結果がビジョンでなくて、ビジョンの中では空き家をどう扱っていきましょう、というのがビジョンだと思う。

色々なタイプの人々がチャレンジしにくるといった時に、こういうカテゴライズで分類していると示した方が使いやすい。空き家をただの空き家ではなく、状態や用途だけでない、所有者の意思、気持ちもカテゴライズに加わっていて入っていく。そのあたりで分類していく。それが、目指すべき空き家ネットワーク。

〔委員〕

今ある空き家は、選択肢がないことが問題。選択肢が多様でわかりやすくマッチングさせやすいカテゴライズをしていくとよい。全く渡してしまうのが抵抗ある人も10年だけならいいですよ、という人もいるかもしれない。関係性も多様化していく。

〔委員〕

空き家の持ち主も、こういう条件だったらお貸ししますよ、という人もある。

〔委員〕

空き家の貸し手と借り手の関係性を多様化していく。分類の項目が軸でカテゴライズすることによって、空き家の貸し手側と借り手側にも分かりやすい関係性・状態を作っていくのが、求めている空き家ネットワークで空き家バンクではないか。

この次が、自然と環境という項目。

〔委員〕

ここの柱に入るのか疑問。農とか林業に密接に関係している。

〔委員〕

ここにあるのは違和感。元気にいれるべき。

〔委員〕

将来像を変えるのは問題ないか。

〔事務局〕

現行ビジョンの分野別であてこんでいるので、変更は可能。

〔委員〕

では、元気の項目に移すとして、後ほど話すこととする。  
関係人口という新しいキーワードの説明について、この意見を追加された鈴木さん  
お願いします。

〔委員〕

多様な人材ともっと関われる人を増やしていく。立地条件から言っても丹波は関係人口を増やししやすい地域。観光や交流という1次的な訪問ではなく、移住や定住というどっしりと構えるものでもなく、その間で関われる人を増やしていこうというもの。30年後はもっと変わっている気もする。地域の課題解決に貢献する人口というイメージ。社会課題が多くあるのが農村。その社会課題解決のためのビジネスなども増えてきているので、それに挑戦できる人が増えている。農村のコミュニティは地縁だったが、それに変わる新しいコミュニティが生まれる。今後は、農村であってもオンラインでつながっていけるので、住んでいるのが違う地域であってもホームはここですよ、という地域やコミュニティであることを打ち出していくことが大事。

色々な人材がプロセスに関わっていける地域。今までの観光・交流以上で移住・定住未満という、色々な人材が関わっていける地域という定義で提案させていただいた。

〔委員〕

質問はないか。

今や関係人口という言葉は、地域づくりにかかせない言葉になっている。観光・交流以上、移住・定住未満というイメージしやすいワードを出してもらった。丹波新地域ビジョンならではの関係人口の定義が必要。とても一人歩きしやすいワードで、好きなように使ってしまう言葉。

鈴木さんに質問。このご提案で「観光・交流以上移住・定住未満で様々な関わりができる環境を作る」とは具体的にどのようなことか。

〔委員〕

ひとつは空き家問題。選びやすいということも必要。それを必要としている地域

の人との関わりやすさも必要。観光案内所ではないが、関係人口案内所のようなところに行くと窓口があって、どういう人たちが地域に入ってどういう活躍してますよ、という案内や、移住定住と観光交流の間にある色々な選択肢を参照できるような案内所。これはオンラインをイメージしているが、そういうことも含めた環境づくりがあるとよいと思う。

〔委員〕

関係人口案内所をひとつにまとめてもよいが、地域課題とテーマ型、ふたつの立ち位置がある。外の人をつなぐ仲立ちをするということが出来る地域というのが1つの提案。外から来た人も活躍できる地域。関係人口案内所に参加する様々なテーマ型の団体がテーマの数だけ存在する地域という選択肢もあるとよいと思う。

丹波新地域ビジョンならではの定義を、これから考えていきたいと思う。

自然、環境を元気部門に移動したので、移住・定住、空き家問題、関係人口について、これで提案していきたいと思う。

次に、元気の柱に移っていきたい。

元気という柱は産業に近いかな。ここでとりあげられているキーワードは、農業、林業、産業、商業、観光、ツーリズム、第6次産業とある。

では、その中の農業から考えたい。

〔委員〕

元気のイメージとして、そこに住んでいる人が生き生きしているということがメインかと思う。交流との絡みでいうと、定住している人が幸福感を感じながら生活しているということが、その後丹波に来てもらうのに大事なことで、試しに住みやすいまちであって、一度住むと抜けたくないと感じる地域ということかと思う。そういう視点で農業や林業、商業、労働をみていけばよいと思う。

〔委員〕

では、瀧山さん、農業をやっていきたい。暮らしていきたいと思えるか。

〔委員〕

そう思うことが理想と思う。そこができていないことが課題。

〔委員〕

今、不足している視点を目指すべき姿にいられてもらうとよいと思う。

〔委員〕

資料の中の30年後の姿で「耕作放棄地がない地域」が消えているのはどういうことか。

〔事務局〕

本日欠席の中川委員の意見で、人口減少で農業の担い手が減っている中で耕作放棄地がなくなっているのは無理でないか。別の用途で何かに使われていることが必

要ではないか。というご意見を頂いた。そのため消す形にしている。

〔委員〕

それが耕作放棄地ではないか。

〔委員〕

遊休農地とか、耕作放棄地という表現を考えよう。もしかすると、自然、環境というのに関わってくるかもしれない。

30年後の農業の目指すべき姿にあるのは、人に関すること。経営に関すること。それと耕作放棄地に関すること。

〔委員〕

30年後どんなイメージを持っているかを聞きたい。大型農業でないと儲からないかもしれないが、中規模や小規模で、農業だけでなく農業のある暮らしが農村の醍醐味。それが実現しやすい地域。小さな農業でも夢がある地域。あまり現実味が無いが。

〔委員〕

大規模農家も、これ以上できない、おなかがいっぱいなところがある。大型農家ができないところが耕作放棄地になっている。大型農家も今、生産効率が良い農地を選択している段階。その中で大型農家ばかり増えていくのもどうか。言い方は悪いが、かゆいところに手が届くのが、中小規模、兼業農家。

高齢化して、農業を従来していた人ができない。世代交代したが農作物の作り方が分からないというところを教えてくれる人が地域に減っている。農地を活用していくために集落の中でアドバイスしてくれる人が必要。農地はいろいろルールがあり、集落によって違う。そこのあたりも話しながら、物を売るとなった場合には大型農家やそれを生業にしている人から販売する。販売ルートができれば小規模の農家も作る楽しみができる。

〔委員〕

それが本当の農家のネットワークだ。

〔委員〕

小さい農家の立場から言わせてもらう。大型化して農地集約してスマート農業と言われているが、丹波地域では難しいところもある。丹波の主要な農産物に魅力を感じて作りたくなるような、小規模の農家が安心して農業ができるような体制づくりが必要。集落は高齢者ばかりで、集落営農は無理なので、もう少し大きなくくりで営農できる体制づくりをして欲しい。

女性の力の活用についても、女性同士のネットワークも強くしたいが、後押ししてもらえらるような体制づくりをとってもらえるとよいのではないかと思う。小さな農家は大型農家のように売り先が独自であるわけではないので、JAを通じた出荷になってしまう。個々でも販売できるようになれば、専業しなくても何か農業でやっていける道が開けるのでは。

〔委員〕

うちは専業大規模農家になる。構井さんが言っていたように大規模農家もいっぱ

いいっぱい。丹波の市島では有機農業が盛んで、受け入れ体制もしっかりしている。移住してきて有機農業をやりたい人が結構いるが、米を作るのは資金が大変で、野菜から作る。野菜を作ろうと思ったら面積がこなせないなので、小さい畑からスタートする方もいる。僕は面白いものを見てもらおうと思い、SNSをやっている。丹波は面白いな、と思ってもらえるとうれしい。

〔委員〕

有機を商品化するというのは、単に農業というのではなくて商業、労働、観光、ツーリズム、第6次産業に結びつけていかないといけない。そういうのを欲している農業生産者の方にはつないでいく必要がある。

農家だけでなく、大規模、小規模、専業も兼業もそれぞれがそれぞれに目指す農業ができるとよい。新規で有機を、という人も是非ともがんばっていただきたい。

〔委員〕

30年後に目指すべき姿としては、耕作放棄地が生まれずに、先祖代々守ってきた小さな農地であっても、誰かが耕して生き生きと農業をしている地域ということでよいですね。そこから、何をしていたらよいかを考えないといけない。

〔委員〕

小さな農地を誰かが耕しているというのは理想形だが、例えば山に戻すとか、中川さんが言っていたように別の使い方もあるよ、というものを認めていく必要がある。

〔委員〕

山に戻っていくというより、そこに合った作物を作るということ。先祖代々守ってきた農地というのは、陽当たりが悪くても、土地土地、場所場所にあったものを提案する形で荒れた地を出さないようにしている。そのことが大事。

こつこつやっても獣害という問題も出てくるので、きちっと整備して農地を農地であるように保存していくというのを目指していく。

〔委員〕

耕作放棄地ではないといえそうだが、ソーラーパネルがよいということではない。何が必要かという、そこに人が加わるということ。農家数を減らしてはいけない。小規模でも中規模でも誰かが農業を続けたいといけない。そうでないと、草刈り、獣害対策、池の水の管理は誰がするのか、という問題になってくる。多面的機能の保全というところで、農業に携わる人が生き生きと農業に携わっている。その結果、耕作放棄地が発生していない、というのが、30年後の目指すべき姿。

〔委員〕

今、大事なことを言われた。「農家」ではなく「農業に携わる人」を減らさないということ。農業に携わる人が生き生きと生活している。

農業への携り方は様々。すごく儲けたい人もいれば、世界に輸出をしたい人もいれば、自分が食べるためにつくる、買ってくれるこの人のためにつくるという人もいます。色々なスタイルがあって、それをひっくるめて農業に携わる人。それを減らさないということも大事。

〔委員〕

農家さんだけでなく、人のために作物を作る人や買ってくれる人まで含める。

〔委員〕

今ある数字は農家さんの数で、農業に携わる人の数は把握されていないが、これから私たちは農業に携わる人に注目していく。

〔委員〕

その人の幸福感を増やしたい。現状としては、農業に携わる人はしんどいという思いの方が強いと思うので、その幸福感を増やしていく必要がある。

〔委員〕

しんどい時に助けを求められる。アドバイスをしてくれる人との関係性をどう構築していくか。を考える必要がある。

農業の後半で山林の話が入ってくるが、鳥獣が生きるために山に餌がきちんとある環境を作ることについて、専門の鈴木さんはどう思われるか。

〔委員〕

たぶん、いくら山に自然に食べるものがあっても里山で食べるものの方がおいしいので、獣は里山に降りてきてしまう。食べさせないということも大事。棲み分けは難しい問題と思われる。適度な棲み分けできる範囲で、と思う。

〔委員〕

山に餌を作っても、やっぱり降りてくるのは仕方ない。鳥獣対策と農業を分けて考えた方がよい。

次は、林業。林業はよくわからないが、山が畑化してスマート林業が進んでいる地域、とある。

〔委員〕

そもそも林業に携わる人が減っているので、山の管理ができていない。

〔委員〕

ここ数年で林業に携わる若い人が増えてきてはいる。丹波市でも、もともと材木屋さんで、工務店で家の建築などをして、それから林業に携わる人は増えている。

〔委員〕

全体的にみて、林業人口はどうなのだろうか。

〔委員〕

林業に携わる人は足りていない。始めたばかりの人でもめっちゃめっちゃ仕事がある。

〔委員〕

林業は林業として成り立つようにならないと。

〔委員〕

兵庫県では、兵庫県産の木材を使うと住宅で補助が出たりする。丹波も丹波材を使って家を建てると補助がでるというシステムがあればいい。

〔委員〕

魅力発信みたいな感じでできればよい。

〔委員〕

30年後の姿としては、丹波材の魅力がアップしている、といったような形になるだろうか。

〔委員〕

林業の今の課題や今後の見通しなどは、実際に林業に携っている人に聞いて欲しい。

〔事務局〕

林業関係は、森林組合にもヒアリングに行って、この意見も森林組合からいただいたもの。

〔委員〕

いきなり畑化を目指すのではなくて、荒れた山がないような十分な林業人口がいる、ということと、丹波材の魅力が知れ渡っている。さらに、林業をしたい若者が生き生きと仕事を続けているというのを提案していきたい。バイオマスなどで活用が進んでいるということも必要。

次に自然と環境に行く。農業や産業に近いので、ここに入れたいと思う。  
ここに自然とのつきあい方を入れるか。

〔委員〕

30年後どうなっているかという予測には、AIなどがもっと普及してくると、多くの人が仕事を奪われて、奪われた人たちが何を求めるかということ、手作業に携わる。手作業の一番できることは農業。農業だけではないが、生業とは違うところの自然との付き合いだったり、環境との付き合いということで、需要が増すのではないかと思う。

生業とは違う豊かな自然とか環境の中で暮らせるというのが、目指すべき姿なのではないか。

〔委員〕

森の中での暮らしでなくて、自然環境と調和した暮らし、のようなイメージで書くといいだろうか。

〔委員〕

農業とか林業と比べるのであれば、農業や林業は生業的に職業として見る要素が

高いかと思う。

もうひとつのイメージとしては、自分の住んでいる地域の山をよいものにしていきたい、自分の暮らしを豊かな暮らしにするために農業に携わりたい、そこに棲んでいる生き物たちを保護していきたい、とか守っていきたい、といったもの。どちらかという、生活に密着した豊かな暮らしの中につながる、自然とか環境との付き合いというイメージなのかなと思う。

〔委員〕

精神的な豊かさを求める、というようなことか。

〔委員〕

自分が食べるものは自分で作りたいとか、それをやりたいといったイメージ。

〔委員〕

生業とは異なる、という、言葉としてアレルギーを持つ人がいるかもしれない。精神的な豊かさに発展するとか結びつく、自然と調和した暮らし、ということにするか。

こういう時の野生動物とのつきあい方は、どうなるのだろうか。

〔委員〕

動物の関係は分からないが、よい関係になってほしい。一方的に害を与えている存在ではない。ちょっとは害はあるけど向こうから得るものもある、みたいな感じ。精神的な距離は近いが関係性は多様、といった形だと、感性を豊かにすることができると思う。

〔委員〕

自分は猿とは上手につきあえないと感じる。森への正しい知識の普及ということには、動物との付き合い方もある。考え方によって全く違ってくる。

〔委員〕

害とされることが多くあるが、ここで完全に棲み分けるわけではなく、関係性が続いていた方がよい。

〔委員〕

商業労働に、ものづくりのキーワードを足したい。商業も全然ないわけではない。地場産業も取り上げたい。(丹波の地場産業は、丹波焼と清酒)

〔委員〕

商工、労働、観光・ツーリズム、第6次産業はかぶる部分がある。自分の仕事としてはこの分野のことがメイン。最近思っていることを伝えたい。丹波地域の産業構造を調べたら、平成27年のデータだったが、GDPのうち第1次産業が2%とか3%で第3次産業が60%くらい。我々は観光や小売りで3次産業に関わっているが、第3次産業が丹波エリアで上手くいっているのは第1次産業がちゃんと管理されているおかげだと思っている。ここにお金の流れを作っていく必要がある。ここが崩れると第3次産業も崩れるだろう。

自分がやっている宿の場合、周りの景観を作ってくれている農家さんに2倍とか

3倍とかの単価で作物を買っているが、そういう仕組みづくりが必要。おしゃれなお店に有名なシェフを連れてくるのはいいが、その時にどうやって地域の第1次産業を支えている人にお金を流していくかをプログラムしてから作っていかないと、全体的な成長が止まってしまう懸念がある。

〔委員〕

私もその内容には同感。

〔委員〕

第1次産業の作物の中でも、商工観光で使うもの、外貨を高単価で稼ぐものは、高単価で出していく。そういう棲み分けが作れたら、全体の産業が伸びていく。ここにおられる宮垣さんの会社の宮垣農産のお米は、高単価で売れる仕組みができています。観光産業になるような話。6次産業化といえばカテゴリーが広がるが、ルールというか、地域にとって最適解なんだなというものをビジョンとして作ればよい。

〔委員〕

丹波ブランドというものを表号しているツーリズムや商品に対して、地域内の産品を使うといったようなブランドの要件を作ればよいと思う。フリーライドする、どこから持ってきたか分からない材料で作ったものを丹波で売って、丹波ブランドというのはずるい。そうすると結局、地域にお金が還元できない。外貨が稼げるものに対しては地域内で調達する時は、高単価で返せるようなルールづくりが必要。丹波ブランドの構築という言葉でくくれないかという気がしている。

〔委員〕

観光にしても、篠山口まで来るまでの車窓が綺麗でないと、結構観光客も減ると思う。福住地区も途中で太陽光パネルが延々とつながる土地だとすると、絶対に観光客が死滅する。そうさせないためのビジョン。観光業者と第1次産業の業者さんでみんなで決めれる指標ができればよい。

〔委員〕

観光客ががっかりしない風景を作る。風景も丹波ブランドのひとつ。丹波ブランドを作っているのは、ものを売っている人だけでなく、作っている人も、地域の風景を保つために活動している人も、丹波ブランドをつくることに貢献している。彼らに対し、そのブランドから得られた価値が還元されていないといけない。

〔委員〕

商業労働のところでサテライトオフィスという話も出てくるが、判断基準としては、家賃が安いから来る。ネット環境があって、広くて安いから来るというもの。窓の外の景色が良いことに対してどうお金を払ってもらうかを設計しないといけない。

例えば、サテライトオフィスで働く人たちがAmazonで買ったものを日常に食べていて、地域にお金が落ちないということであれば、無駄になる気がする。

〔委員〕

方向性のある関係人口の話、ということではないかと思う。それに対していい名

前をつけたい。

「丹波を守るための」というのが大きな目標としてあって、その下にビジネスが位置づけられていたり、交流人口や関係人口がいるというイメージで未来を描いていった方がよい。

利益を最大化するというより、真心につながるようなビジネスを積極的に推進していく、みたいな。大きなビジョン、文言があった方がいい。

〔委員〕

それをどう織り込んでいくか。言葉選びや区分けを替えるくらいしか今この場ではできないか。

〔委員〕

そもそも元気という柱の名称を、もっと言い換えられないか。

〔委員〕

何がよいのか。生業でなく、豊かな幸福な暮らしとか。これは、次回の全体会で協議する。

まとまっていないが、意見は多く出たと思う。

最後に、皆さん言い残したことはないか。

〔委員〕

住むところと仕事はセットだと思っている。今年から従業員を雇っているが、近くにシェアハウスを借りて生活していて、1年になる。

〔委員〕

仕事と生活が近接しているのは、ある種、田舎の利点。私はそれがうらやましくて移住してきた。「住む」と「働く」の両方の大切な場所が近いのは、2倍大切な場所になるということ。

〔委員〕

項目によっては、複数の柱に関係するところもあるので、柱のつくり方だけは気にかけて欲しい。

〔委員〕

商業や労働、観光、ツーリズム、第6次産業は関わってくることが多い。ここは割とひとつにまとめてもよいのでは。全部が関係してくるので、かけあわせた形での提案でもよい。

〔委員〕

元気の分野は、何で生活していくかということか。稼ぐというよりも暮らすという感じ。何で元気にしていくか。

もう一つプラスしないといけない視点ということで、アートが必要ではないか。何で自己実現をしていくか、ということ。他の部分でもあまり記述がない。

[委員]

元気でなくて、生業もどうかと思うし。

[委員]

何で生活していくか。基盤をどこにおいていくか、というようなところか。

[委員]

元気でなくて、生きがいでいいのではないか。

[委員]

生きがいもありふれているし、暮らすとか。アートや芸術という部分もあれば。

[委員]

いろいろなご意見がきけて非常によかった。ありがとうございました。

## 6 閉 会